

第4回 八月二日(土)二時から

わたしとわたしたち

野崎康夫(世話人)

「わたし」というテーマは哲学の中でも古くから多くの人の興味を引き、悩ませてきたものです。今それを取り上げて考えるというのは、わたしにとっては分不相応のように思われます。今回あえてそれに挑戦しようというのは、「わたし」と「わたしたち」の間にはどんな関係があるのかを考えてみたいからなのです。

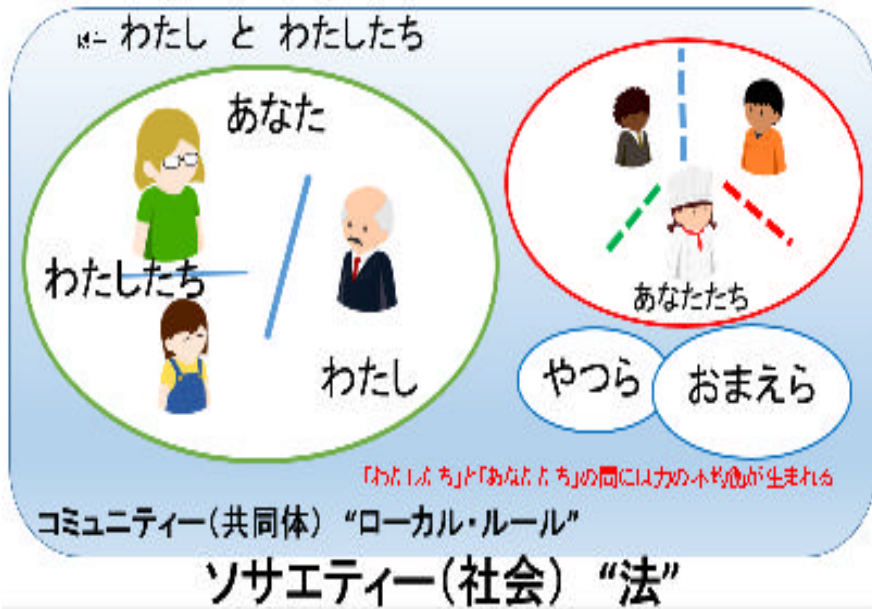
わたしたち(とりわけわたし)は、毎日なにかしらのモノやコトに出会います。そしてそのそれぞれを区分けし、安心したり心配したりします。例えば、コップと茶碗を区分けすることで安心してそれらを使うことができます。「微笑み」に会うと、好意をもつていくれるのかそうでないのが不安になります。「微笑み」をコップと茶碗のように明確に区分けすることができないからです。こうしたことは、社会で生きていく上では絶えずあることです。「わたし」と「わたしたち」では、安心も不安も大きく違っていている様になります。そこを考えていきます。

話し合いは、前半と後半の二部構成にしたいと思っ

思っています。

前半は、「わたし」について考えます。「わたし」は決して一人で成立するものではありません。おそらく「あなた」によって「わたし」は支えられていますし、「わたし」によって「あなた」も支えられています。人間は相互に支え合っています。そのことを「ことば」の力(あるいは役割)から考えてみようと思っています。

後半は、他者を支える力である「わたし」が「わたしたち」にかわる時に他者を排除してしまう大きな力として働いてしまうことがあります。



「他者の排除」といえば強い響きがありますが、「役割分担」ということも、「あなたの役割はこれですよ」という緩やかなことばで「排除」することもあります。それが繰り返されることで制度となったりヘイト・クライムになったりします。わたしたちの社会を揺るがすことにもなりかねません。

そんな視点で、「わたしとわたしたち」をパワーポイントを使いながらやさしく考えてみようと思えます。

三回 「危機の時代を」とどうとらえるか 感想

久々に話題提供の機会を与えていただきありがとうございます。レジメが詳しくすぎて戸惑われたかと思いますが、話し下手なので質問対策に作成しました。概要文の見出しに加えて副題を付けましたが、私は「縮小社会」が、二一世紀のグローバル化した現代社会にふさわしい表現だと思っています。縮小社会は、地球資源の枯渇、環境汚染、気候変動、パンデミック、格差社会の状態を深刻化させ、経済の拡大成長を目指しながら、諸集団の分断・対立と混乱・腐敗を招いてしまつという今までにない解決困難な人類史的危機の時代です。

しかし、希望はあります。古代ギリシャに起源を持つ西洋文明の思想や哲学・宗教は、ソクラテスによる心(魂・精神)の永遠性の発見以来、自然や物質的存在を超越(創造・支配)した神や絶対的精神的存在に救いを求めてきました。しかし、東洋では、インドのシャカや中国の老子のように、自然や宇宙の無常性・無限性との一体化(物心一如)に安心立命や救い、慰めを求め、出家や出世間によって解脱や覚醒を目ざ

しました。東西文明における世界宗教（哲学）の成立後、商業の発展とともに大衆化・世俗化（営利主義・菩薩信仰・現世利益）が行われましたが、東洋思想に含まれる自然（環境）との一体化や欲望の抑制（小欲知足）の思想は脈々と受け継がれ、「心の危機」を乗り越える一助になると思われませんが、さて皆さんのように考えられるでしょうか？（話題提供者 大江）

「あらかじめ存在している指示に従え それを正し」とするのが教育だ」（橋本治 人はなぜ美しいがわかるのか より）と昔の学生時代の学校を彷彿とさせる雰囲気が一瞬あった。レジユメは歴史の変換点をわかりやすく纏められて良かったのですが、私的に残念だったのは、一つふたつでも過去の危機の原因、そしてその打開策、その後の状態のドラマをご教授願えたら、今回のテーマに沿っていて、なお興味深かったと思います。漠然としたテーマのなか、参加者の女性が提案くださった新自由主義のお話の中の経済学者の名前が、よく聞きとれなかったので、メモなど取られていたら、誰か、お教えください。そのテーマで私が思い出したのが白井聡の「武器としての「資本論」」のなかのデヴィッド・ハーヴェイの新自由主義について見解「これは資本家階級の側からの階級闘争なのだ」「持たざる者から持つ者への逆の再分配なのだ」また、その中にベルナル・ステングレルの「象徴の貧困」において肉体を資本によって包摂されるうちに、やがて資本の価値観を内面化したような人間が出てくる。すなわち感性が資本によって包摂されてしまうのだ。そして、とりあえず、資本に包摂された「新自由主義者」たちは、資本に奉仕する道具に値しない人間を分断、抹殺し始める。貧乏は自己責任だ。貧乏でも我慢

しろと。と話したかったが、力不足で伝えられなかったのが残念です。山陰の光と影の喩でお話くださった方の民主主義の大切さの言、中国やロシアの立場から見た新自由主義はどうなんだろうとかとお話くださった方たちとも、時間があれば、お話がしたかったです。いつか労働から解放される近い日が来れば、生々しい問題意識を持つマルキシアン達を危機の打開策としてもっと勉強したいと七十歳になった今も夢見ています。（MO）

現在の「危機の時代」を、膨大な歴史の流れを俯瞰することからとらえようという壮大なテーマで、資料の準備も大変だったことでしょう。六〇年近く昔の高校時代の社会科の総復習をさせて頂いた気がします。当時は現代史の部分は、入試に出ないとか、時間切れとかで端折られることも多く、歴史を暗記科目ととらえ、今の自分の問題を考えるために重要な学科と考えない生徒が多かったかもしれません。最近「あなた自身の社会スウェーデンの中学教科書」という本を読み、子どもたちを現実社会の構成員の一員として、当事者意識を持つようにと考え抜かれた教科書に驚きました。現在、加藤陽子さん（東京大学文学部教授）が実際に高校生を相手に五日間にわたって日本の近現代史について講義した『それでも日本人は「戦争」を選んだ』を読み始めています。一九二九年の大恐慌以降の外交と軍事が専門の加藤氏は現在に生きる高校生にその部分の歴史を現在の問題とからめ、日本の視点、相手国の視点を交えて説明し、では君たちならどうするかを問いかけ、生徒たちは自分の問題として答えています。優秀な東大生に教えながら、それでは遅すぎると実感された加藤氏の次の世代に伝えたいという熱意を感じ、今こそ必要な授業だと思いました。（N）

大江様のテーマに魅かれ前二回に続き参加した。人類の歴史的な危機を、日本史、世界史に見ての資料を準備し、現代の複雑な危機をご説明いただいた。参加者の地域からの現実の活動の一つとして国際的な数理経済学者宇沢弘文に、持続可能な社会づくり学んでいる例が話された。それは何だったのか補足する。一九二八年山陰の米子市に生まれた宇沢弘文は、一九七四年の「自動車の社会的費用」、一九九一年ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の一〇〇年に一度の回勅「社会主義の弊害と資本主義の幻想」の助言者として知られ、一九九七年文化勲章、二〇〇九年地球環境国際賞のブループラネット賞を受賞した。宇沢弘文の死後五年間、宇沢の先見性に学ぶ活動と、追悼フォーラムを市民グループ「よなご宇沢会」は開いてきた。昨年一二月八日のフォーラムは、ジャーナリスト池上彰氏と宇沢の娘で内科医の占部まり氏の講演などで、米子市公会堂を埋め尽くす一〇〇〇名近い市民が参加して開かれた。大気、森林、水などの自然環境や、教育・医療・金融などの制度、道路・上下水道などのインフラという社会的共通資本を重視した米子づくりを目指す市民の機運が高まりを見せている。（YO）

五回 九月二六日（土）

ケア労働と

BI（ベーシックインカム）

同志社大 経済学部教授 山森 亮さん（ゲスト）

